

PROGRAM NOTE 2024年5月

HCJB 日本語放送60年の歩み(5)



1970年台に日本の若者たちの間にBCLブームを巻き起こした山田耕嗣さんは「アンデスの声」が1964年5月、南米エクアドルから日本語放送が開始すると同時に遥か太平洋の彼方の日本から最初に受信レポートを送ってくださったリスナーでした。

その日以来、山田さんとは地球の裏表で相互に交流を深め、私たちが一時帰国した折には必ず秋葉原のラジオ店をはじめ、全国各地の百貨店やラジオ店などをともに飛び回ってリスナーの集いのお世話をさせていただきました。

「まるで新幹線の時刻表みたいだ」とこぼしていたほどのスケジュールでし

た。ある時、「尾崎さん、近くエライことが起こりますよ！」と耳うちされて間もなくBCLブームが押し寄せてきました。山田さんの活躍もめざましく、予測どおり海外放送に魅せられた中高生リスナーからの受信レポートがうなぎのぼりに増え、日本語部の壁の来信数を示す棒グラフがぐんぐん伸びて天井を突き抜けるほどになったのです。毎日山のように届く日本からの手紙は郵便受けには入りきれず、ダンボールの箱に詰め込んでオフィスまで運ばなければなりません。日本語部のスタッフだけでは処理しきれないので、局内の宣教師仲間や在留邦人の方々にも“封を切るだけでも”とボランティアとしてかけつけてもらい返信業務を手伝ってもらったほどでした。会計からは返信のための費用がかかり過ぎるという声があがり、節約しなければと考えついたのが「La Voz (声)」という封筒型のニュースレターの発行でした。番組案内やリスナーからの手紙などを掲載した機関紙で、個人メモも書き加えて、三つ折りにすると封筒代わりになるので、その中にペリカードを同封すれば封筒が節約できるので予算オーバーにはならないだろうと考えたのです。



「危機」といえば、私の声我突然出なくなったこともありました。ほかに異常はないのに、とにかく声がかすれてしまい、いつもの声が出てこないのです。医者の診断では別に異常は認められないので処置なしといわれ、ただ「声」は出さないようにといわれました。そこで人とも話さないようにするために<Don't Talk>とカードに書いて首から下げて局内を歩いていたところ、息子から<話すな>と命令するのではなく「自分は話せません」という表現に変えるよう注意されてしまいました。そのうち声は徐々にもどり、そのカードも必要なくなり今も現役で張り切っています。

昭和・平成・令和の3代を生かされている身を感じながら、神に与えられた使命達成のためにこれからも励んでいく覚悟です。どうかよろしくお願ひします。<ひたすらに信じ仰ぎつ幾山河さらに進まんわが主とともに>

サタデー・トーク

バイブル・トーク

きき手 尾崎一夫 毎週土曜日放送		淀橋教会 峯野龍弘主管牧師 毎週日曜日放送	
5月4日	放送60周年・懐かしの山田耕嗣さん)	5月5日	聖書遊覧バス：詩篇43篇
5月11日	女ばかり南米大陸をゆく(25)	5月12日	聖書遊覧バス：詩篇46篇
5月18日	ギター奏者：アルフォン正田(1)	5月19日	聖書遊覧バス：詩篇47~49篇
5月25日	ギター奏者：アルフォン正田(2)	5月26日	聖書遊覧バス：詩篇50篇

放送後の番組は、ホームページ(<http://japanese.reachbeyond.jp>)のトップページ左側メニューにある『インターネット放送』のリンクページからお聴きいただけます。(mp3形式)

放送時間：日本時間 午前7時半~8時 17650kHz (再放送) 午後8時~8時半 15460kHz
(米国アリゾナ州制作/オーストラリア送信)

